

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 教授

氏名 勝俣昌也

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

獣医学部に所属し動物栄養学を専攻している教員として、獣医学科、動物応用科学科の双方で、動物栄養学関連の科目の講義と実習を担当している。また、獣医学科生産獣医学系に所属する教員として、畜産ならびに産業動物に関わる獣医学科の講義と実習を担当している。これらの講義と実習では、畜産に関わる国立試験研究機関に勤務した経験を活かし、近年の農業施策と関連した栄養管理、飼養管理についても講義している。

研究室では、ブタの栄養に関連する研究課題に所属学生と共に取り組んでいる。ブタの栄養の新展開としての「ブタの時間栄養学」、養豚現場を支える「ブタのアミノ酸要求量の推定」が、現在のおもな研究課題である。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
獣医栄養学	獣医学科	必修	3	161
総合獣医学	獣医学科	必修	6	139
獣医畜産管理学	獣医学科	選択	3	146
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	124
飼料原科学	獣医学科	選択	3	143
競馬の世界	獣医学科	選択	1	128
牧場実習	獣医学科	選択	2	123
獣医学特論I	獣医学科	必修	5	2
獣医学特論II	獣医学科	必修	6	2
栄養化学	動物応用科学科	必修	2	136
動物飼養学	動物応用科学科	選択	3	133
動物栄養学実習	動物応用科学科	選択	4	12
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

1980年代に大学生だったわたしたちは、指示どおりに動けばなんとかゴールにたどり着ける日々を過ごした最後の世代かもしれない。しかし、社会の変化が速く、先が見とおせない今では、指示にしたがってもゴールにたどり着ける保証はない。指示が間違っていることの方が多いかもしれない。また、わたしたちの世代にとって、効率化は金科玉条だった。しかし、そのことの弊害にわたしたちは直面している。複雑で多様な社会と生態系を、わたしたちの世代は効率化の名のもとに壊してしまったのではないだろうか。地域社会の脆弱化と気候変動はその帰結だと思われる。わたしたちの世代は責任世代ということを実感しなければならない。

そんな難しい社会に若者を送り出す責任世代の大学教員にとって、大学教育とはいかなるものであるべきか。わたしは次のように考えている。学ぶことは変わる。学生生活のまえとあとの自分の変化を、学生たちに実感してほしい。そして、学ぶことは、自由な自分に近づく第一歩。自由な自分なら、どんなに社会が変化しても、希望を失わずに生きていけるはずだ。自由に近づく喜びを、人生をとおして味わってほしい。そして、研究をとおしては、「知るを愉しむ」を経験してほしい。研究は自分の奥の深いところから「たのしい」と感じることができる営みのひとつだ。これを経験することが大学生活の大きな意義だろう。そのためには、わたし自身が「愉しむ」ことが不可欠ということをつけ加えておこう。最後に、若干技術的なことも書いておきたい。麻布大学獣医学部は「生き物」を学ぶところで、「科学」に関する素養を深める場と言ってよい。獣医学科の学生はもちろんのこと、動物応用科学科の学生も、自分が学んだ科学に関する素養を活かし、他者を支えることができる、そんな人に育ってほしい。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

理念のところでも書いた「自分の変化を実感できる学び」には「大学生らしく学ぶ」ことが必要だと考えている。では「大学生らしく学ぶ」とはどういう学びかといえば、『「未知との遭遇」をとおして自分なりに考え「ほんとうのことに近づく」』がわたしの考えである。その前段として、土台としての基礎知識を講義や実習で習得する必要がある。その後の卒論研究では、まだ誰も取り組んだことのない「問い」に取り組む。この段階が「未知との遭遇」となる。研究なので、仮説どおりになるかどうかは誰にもわからない。がっかりすることもある。しかし、自分が習得した基礎知識を活かし、教員や仲間と議論しながら自分なりに考え、「ほんとうのことに近づく」経験こそが、「大学生らしい学び」であり、「自分の変化を実感できる学び」だとわたしは考えている。このことをとおして、学生たちは「知るを愉しむ」を実感できるだろう。そしておそらく、「ほんとうのことに近づく」ために「大学生らしく学ぶ」ためには、効率的な学びは必ずしもふさわしくない。「大学生らしく学ぶ」ために、教員としてわたしが重視していることを以下に説明する。

土台となる基礎知識；わたしが担当している科目のうち、わたしがひとりで担当している獣医栄養学を例にして説明する。獣医栄養学では獣医学教育モデル・コアカリキュラム（コアカリ）の臨床栄養学コアカリに準拠して講義の骨格を組み立てている。しかし、臨床栄養学コアカリだけでは、産業動物の栄養管理・飼養管理について講義できない。獣医栄養学は

生産獣医学系の科目でもあり、産業動物について講義しなければ片手落ちになり、産業動物の栄養管理・飼養管理について講義を受けないまま学生たちは卒業していく。それではまずい。畜産に関わる国立試験研究機関に20年以上勤務したわたしの経験を活かすこともできない。そのような理由から、それぞれの産業動物種の栄養管理・飼養管理、さらには産業動物の生産現場がかかえる問題点などについて、基礎的なことを講義している。しかし、これだけでは教科書的な知識だけを伝えることになり、学生たちが新しい気付きを得るには十分ではない。そこで、講義内容と関連する分野の新知見や、栄養に対する動物のエレガントな反応に関わる知見などを、随時取り入れるようにしている。そして、学生たちからのフィードバックを得るため、そして、学生たちが学んだ内容を振り返ることができるよう、「今日の講義で得た新しい気付き」について毎回200字程度の小文を提出してもらっている。臨床栄養学コアカリ、産業動物の栄養管理・飼養管理に関する講義を大切にしつつ、学生たちが新しい気付きを得る工夫をしていきたい。

卒業研究 未知との遭遇；研究室に所属すると、学生たちは卒業研究に取り組む。学生たちにとって、卒業研究は人生初めての未知との遭遇かもしれない。誰も取り組んだことのない課題なだけに、見つけたことは自分だけの発見になる。わたしは学生たちと一緒にブタの栄養を研究している。栄養状態に対するブタのエレガントな反応をみつけることができれば、やっただけのことはあり、喜びをもたらしてくれる。しかし、思うようにいかないこともある。ブタはサイズが大きいだけに、物理的な制約が多く、一つの課題を完了させるのに数年かかることも珍しくない。また、複数の課題を同時に走らせることも難しい。こういう事情があるので、学生たちのアイデアで新たな研究課題を毎年設定することは、残念ながら、できない。それだけに、学生たちが参加することになる研究課題の意義、目的、見通しは、（あたりまえだが）丁寧に説明するようにしている。また、ブタを対象とするのでチームで働くことが多い。面倒な仕事・作業に進んで取り組んで欲しいと、折に触れて話すようにしている。また、学生たちが自分の意見、考えを言いやすい雰囲気をつくりたいと願っている。いまでは「先生、こっちのやり方のほうが時間短縮できるし、うまくできますよ」と学生たちから提案されるようになり、わたしが何もしなくても、現場での作業は学生たちが的確に受け継いでくれるようにもなってきた。

研究室ではゼミも開催している。原著論文の文献紹介の場合、学生たちがいきなり本番に臨んでいたころは不十分な発表が多く、必ずしも有意義な時間とならなかった。そこで、本番の1週間前には発表資料を教員にみせて添削を受けるようにしている。このことにより、発表者と参加者ともに、理解は深まってきているようだ。しかし、ゼミでの質疑応答はなかなか盛り上がらない。そこで、出席者の全員が、少なくともひとつの質問・コメントをしなければ、ゼミを終了しないことにした。そのことにより、発表者は質問されることを前提にして準備してくることとなり、出席者は質問することを前提として発表を聴くことになり、少しずつ大学のゼミらしくはなってきた。

最後に、自分の発見を他人に伝えることも経験してほしい。2025年度は時間栄養学会で獣医学科の5年生に発表してもらった。この取り組みは2026年度も続けていきたい。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

無

現状特に実施していない。

(2) ICTの教育活用

有

授業の教材スライドをPDF化したものをLMSからダウンロードしてもらっている。現在は、LMSを使った小テストにも取り組んでもらっている。講義は毎回Google Meetで録画し、動画をLMSにアップロードしている。さらに、配慮申請を提出した学生にはGoogle Meetを活用してオンライン（あるいはオンデマンド）で受講してもらっている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

「今回の講義での新しい気付きについて」という200字程度の小文を毎回提出してもらっており、そちらでも学生の反応は確認できるので、この取り組みは今後も継続する。

(2) 学生の理解度の把握

B

前述したように、「今回の講義での新しい気付きについて」という200字程度の小文を毎回提出してもらっており、学生の理解度や興味関心について把握することに努めている。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

1週間前には講義資料をLMSにアップロードしている。しかし、予習を促すに至っていないようだ。「今回の講義での新しい気付きについて」を書くにあたり学生は講義内容を反芻ことになるはずで、最低限の復習には結びついているのではないか。また、動物飼養学と栄養化学ではLMSを使った小テストを課しているため、こちらも復習に結びついていると考えている。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

対面授業で質問があったときは、その場で回答できるものはその場で回答する。持って帰って調べる必要があるときは、翌週の講義の時に「このような質問がありましたが、調べたところ、こういう回答になります」と全員に説明するようにしている。メールで質問があったときも上記と同様の対応をしている。さらに、学生たちが提出してくれた「新しい気づき」に対して可能な限りコメントを返すようにしている。

(5) 双方向授業への工夫

B

前述したように、学生たちが提出してくれた「新しい気づき」に対して可能な限りコメントを返すようにしている。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

6Vの総合獣医学の「栄養学」の授業を担当している。国家試験の過去問題で「栄養学」に関連する問題を解説することになっている。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

講義を聴きながら配布資料の空欄を埋めるようにしてもらっているが、わたしが話すのが速すぎるといったコメントがあったからは、意識的にゆっくり話し、かつ、次に進みますよと確認するようにしている。声が小さいというコメントがあったからは、意識してマイクを口に近づけるように努めている。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

解決できていると考えているが、引き続き意識して取り組みたい。

(3) (2) を踏まえた次年度の取組

2026年度も学生の指摘要望には速やかにかつ的確に対応する。獣医栄養学と動物飼養学の講義では、学生は講義資料に穴埋めしながら講義を聞くが、2026年度も引き続き穴埋めに必要な時間を十分とるように心がける。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

成績向上の意味するところが「不合格となる学生数を減らす」であれば、成績の総合評価に占める定期試験の割合を50%に下げている。2026年度も継続する。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

学生の成果：関東畜産学会優秀発表賞の受賞（2019年、2020年、2021年度）

学生からの評価：新しい気づき、授業評価ならびに直接メールなどで寄せられた要望。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

出張等と重ならない限りFD研究会には参加している。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

①学生が自分の変化を実感できることを目指す。講義実習では学生の新しい気づきを大切に。具体的には、学生の新しい気づきに対するコメントを、可能な限り翌週の講義までに返すようにする。

②研究室活動では、データを取得するところまでは学生たちができるようになってきた。次のステップとして、データの意味を自分で考えることができるよう、独習する習慣を学生たちには身につけてもらいたい。その一助として、ブタの栄養を一緒に研究している学生たちとは、ブタ班文献ゼミと称して、2週間に1回程度の文献紹介を開催していた。2025年度、とくに後期は飼養試験が忙しくブタ班文献ゼミを開催できなかったので、2026年度は再開したい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

授業に関するもの；シラバス、小テスト、レポート課題、試験問題、スライド資料、配布資料

教育改善に関するもの；（わたしは記録を保管していないが）FD研究会への参加記録

他者から提供されるもの；学生の授業評価、学生からのメール

教育/学習の成果；関東畜産学会優秀発表賞の受賞（2019、2020、2021年度）、学生が作成した研究室ゼミの資料（スライド）